

飲みたい事は飲みたいが、恐らく権が考えているものとは全く異なる意味で飲みたい。

その内心だけは悟られないようにしよう、となんとか表面上だけでも冷静さを保ちながら、缶を顔に近付けた。

手が――震える。

缶に唇が、あともう少しで……触れる。

「ぶはあつ」

触れられなかった。

緊張して手が震えるし、そもそも権トシキ本人が見ている前で間接キスに挑戦するなど、一体どんな試練だろう。

ばくばくと心臓が高鳴り、呼吸が荒く、到底再挑戦など出来よう筈もない。

「美味いか？」

「あ、うん」

本当はまだ飲んでいないが、権は一気に飲んだからこそぶはつ、と息を吐き出したのだろうと思っっているようなので適当に相槌を打ち、話を合わせる。

まさか間接キスを意識し過ぎて貴方の目の前では飲めません、などと言えない。

「そうか」



いつものように仏頂面だけでも、少しだけ。

権が微笑んでくれたような気がした。

(やっぱり、権くんは優しい)

彼の心遣いが嬉しい。

本当の権トシキはこんな風に心配りが出来て優しいのに、どうしてみんなは理解しようとしてくれないのだろう。

「俺は大して喉が渴いていないからな。全部飲んで構わない」

「え。でも、いいよ。それは流石に悪……」

ハッ、とある事に気が付く。

今ここで一口飲んで缶コーヒーを権に返す。

すると、権が残りを飲み干す。

その際、当然権は缶に口をつける筈だ。

(僕が触れたところに、権くんの唇が……！)

見事にお互いの間接キスが成立する。

それは何よりも魅力的な誘惑だった。

「……えいっ！」

思い切つて缶に唇をつけて、ごく、ごく、とコーヒーを喉に流し込む。

正直、味など良く分からない。

かろうじて苦いなというのは分かるが、なんとなくそう感